

100円循環バスくる梨

「くる梨」で手軽に
中心市街地再発見の旅へ！

乗車距離に関係なく、100円の運賃で目的のバス停まで連れて行ってくれる「くる梨」。中心市街地の回遊性を高め、活性化につなげようと、2002年から実証運行が始まった。運賃は100円と潔くワンコイン。バスの愛称とデザインを公募し、「くる梨」として2004年、本格デビューした。



今年10月、青コースの一部変更と全コースのダイヤ改正を予定している。

「くる梨」はこれまで2度、大幅な路線変更を行っている。実験運行をしながらニーズに合うコースを模索し、2013年には緑コースが誕生。鳥取城跡と鳥取駅周辺を智頭街道・若桜街道の二軸で結び、利便性・回遊性をぐっと高めた。

自家用車を持つ人にも「くる梨」はオススメだ。緑バスの乗務員、田中洋一さん（日本交通株）は「バスだと、普段通らない道を通ったり、いつもと違う景色を楽しめます。100円で1周33分なので、気分転換にもいいですよ。事故防止には細心の注意を払っており、ですので、安心してご利用いただけます」と話す。さらに便利なのが、200円の往復料金で全路線乗り放題の1日乗車券。路線が違う名所を巡ったり、ちよつと足を伸ばす日にも活用できる。車両はコロナ対策も万全。「くる梨」でプチリップに出かけよう！

1-2-3_本特集で紹介している鳥取城跡に行くには緑バスへ。青コースや赤コースと交差・並走している場所も多く、乗り継ぎにも便利
4_バス停が約200メートル間隔にあり、高齢者や子連れにもやさしい

<info>
鳥取市都市整備部交通政策課
鳥取市幸町71
☎0857-30-8326

日本100名城鳥取城

新たな門出の場をめざし
復元が進められている

日本100名城に数えられる鳥取城は、城跡と久松山山容を望むまちのシンボルであり、市民憩いの公園でもある。羽柴秀吉による兵糧攻めに遭い、江戸時代には鳥取藩三十二万石の居城となり、明治時代以降は陸軍施設や学校用地、仁風閣建設や公園整備など、さまざまな運命をたどってきた。

建物は明治時代に解体されたが、復元を願う声は時を経るごとに大きくなり、市民主導の「鳥取三十二万石お城まつり」も気運を高めた。鳥取市は2007年度、鳥取城跡の保存整備基本計画を策定。発掘調査で新発見が相次ぎ、石垣



上)鳥取城跡は、旧藩主池田家の寄贈により鳥取市の所有となった。1967年に国史跡に指定。擬宝珠橋は、復元木造橋として日本一の長さを誇る
右)大手門脇の石垣にある、猪目石とみられるハート型の石



左)「鳥取三十二万石お城まつり」は、鳥取城復元を目的に2000年から始まった。今年3月13日にあった第21回は大手門竣工式と併催

<info>
鳥取市教育委員会事務局
文化財課
鳥取市幸町71
☎0857-30-8421

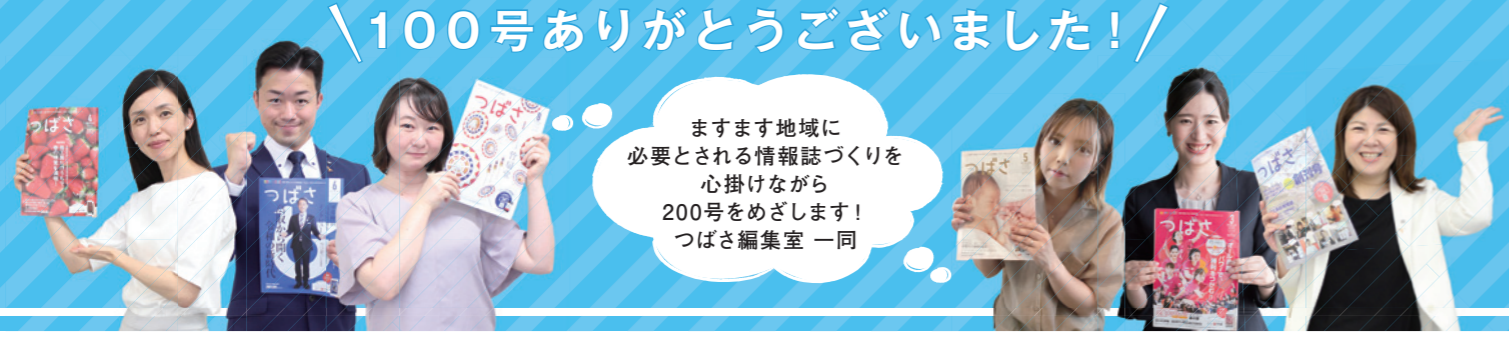
修復が進み、2018年に大手登城路の擬宝珠橋が、21年には大手門がよみがえった。今後は二階建ての櫓門・太鼓御門が復元予定。在りし日の姿を伝えると同時に、将来をもとに歩む資産として、大きな役割を果たしていくだろう。

市文化財課の細田隆博さんは、鳥取城跡を「新たな門出にふさわしい場所」と話す。大手門の北側には、江戸時代に「門出の場」と呼ばれた参勤交代の出発地がある。進学、就職、結婚など晴れの日の記念撮影を城跡ですれば、石垣のハートの魔除け「猪目石」の加護もありそうだ。「プロポーズの聖地になってくれたらうれしいですね」と細田さん。歴史をつなぎ、未来を紡ぐ。鳥取城は、永遠だ。

鳥取市にまつわる100

【巻頭特集】つばさ100号記念! 探してみよう

おかげさまで鳥取地域みっちゃく生活情報誌「つばさ」は創刊100号。せっかくなので、同じ地域内で「100」にまつわるテーマを探してみました。周囲を探してみれば、もっとたくさんの「100」が見つかるかも？



100号ありがとうございました!

ますます地域に必要とされる情報誌づくりを心掛けながら200号をめざします! つばさ編集室 一同

設立100周年鳥取銀行

次の100年に向けて
地方創生もけん引中!

「とりぎん」の愛称で親しまれる(株)鳥取銀行は1921年、(株)鳥取貯蓄銀行を前身として誕生した。今年、100周年を迎える。

社会も技術も目まぐるしく変遷したこの1世紀、鳥取銀行は柔軟な対応と徹底した「地域密着」の姿勢で、鳥取の産業・経済振興に尽くしてきた。近年は地方創生が掲げられ、地方の活力がますます重視されている。鳥取銀行も中心市街地活性化や特産品開発など、さまざまなビジネスの種を育てている。

ユニークなのは、多くの事業で鳥取銀行自身が取り組みの主体となっている点だ。「銀行は資金提供」の

イメージがあるかもしれないが、まちづくりファンドの共同設立、観光DMOやまちづくり事業会社への行員派遣など、事業の構成員として中心的な役割を担っている。さらには行員の副業として、地方創生につながる事業活動を推奨。行員の多様な働き方の実現と地域活性化を同時に推進している。

コロナ禍に見舞われた企業に対しても、ニーズに応じて融資のほか課題の発掘と解決、新商品開発など、踏み込んだ支援を実施。鳥取銀行は、脇で旗を振るサポーターではなく、ともに走る伴走者であり、地方創生をめざすランナーなのだ。

すでに踏み出した次の100年。鳥取のまちと人々のための、新たな挑戦の歴史が続く。



<info> 株式会社鳥取銀行
鳥取市永楽温泉町171 ☎0857-22-8181(代表)

鳥取銀行2021年度
入行の新入行員のみならず



100人一首の句に登場 稲葉山

百人一首の歌人が残した
稲葉山の伝説



上) 国府町庁にある在原行平の歌碑。奥に望むのが稲葉山だ
右) 稲葉山山中の「行平塚」と伝わる宝篋印塔。江戸時代の書物にも登場する



案内してくれたいなば国府ガイドクラブの沖廣俊さんと林田博通さん

<info>
いなば国府ガイドクラブ
鳥取市国府町町屋726
(因幡万葉歴史館内)
☎0857-26-1780

たちわかれいなばの山の峰におふるまつときしば今帰来む

小倉百人一首第16番の歌である。詠み人は在原行平。855年、因幡国守として因幡国府(現鳥取市国府町)に赴任した平安貴族である。

この歌にある「いなばの山」が、国府町と福部町の境界に横たわる稲葉山と考える説がある。それを裏付けるような伝説を、いなば国府ガイドクラブの沖廣俊さんが紹介してくれた。

「京から因幡へ向かう道中、行平は須磨で美しい姉妹を見初め、松風・村雨と名づけて同行させました。任期中、ともに因幡で楽しく暮らしましたが、行平が京へ帰るとき、お別れとなったのです」

歌には「因幡の山の峰に生える松の名のとおり、あなたが私を待っている」と聞いたら、すぐに帰ってこよう」と、惜別の情が詠まれている。松風・村雨姉妹は、福部町左近の村で生涯を過ごしたという。稲葉山の山中には、土地の人々が行平を祭ったと伝わる宝篋印塔があり、「行平塚」と呼ばれている。いなば国府ガイドクラブは、こうした国府町内の遺跡や史跡、名所を案内しながら、歴史や伝承を紹介している。奈良時代に国府がおかれた万葉の里をガイドとともに巡れば、そよぐ風にも悠久の口マンを感じるはずだ。